古墳時代における琥珀製玉類の考古学的研究

―三重県の出土例を中心に―

小　林　友　佳*

Archaeological Research on Ambar Beads in the Kofun Period
― Excavated Example Mainly in Mie Prefecture ―

Yuka KOBAYSHI

要　旨

本稿[1)]では三重県下の古墳から出土した琥珀製玉類に着目し、器種の中でも製作時期が限定される勾玉と棗玉を対象として、形状と法量、穿孔方法に基づく分類・型式を提示した。

三重県下の琥珀製玉類の出土は古墳時代前期末葉から終末期に及び、その流通と生産は中期中葉～後葉に一時衰退する。その後は中期末葉に再流通し、後期初頭には器種の多様化、前葉からは棗玉の各型式の出土数増加が見てとれることから、この時期(中期末葉～後期前葉)を三重県下における琥珀製玉類の画期と捉えた。

琥珀製玉類の生産体制・流通形態には、横穴式石室の系譜と導入時期、畿内政権による玉生産と産出地周辺の動向、須恵器の生産が密接に関係するものと結論づけた。

キーワード：①琥珀　②玉類　③古墳時代　④棗玉

はじめに

近年、玉類研究は資料数の増加により進展している。いっぽう、琥珀製玉類に関しては未報告であるか、資料紹介に留まるものが多く、研究論文は僅少である。中でも古墳時代を対象とした研究においては数える程度である。琥珀製玉類の研究が遅れている直接的な要因としては、琥珀は他の素材と比べ非常に脆く剥離しやすいために多くの場合資料の状態が不良であること、流通を考える上で重要である産出地について、曖昧なまま研究が行われてきたことがあげられる。

現状では、発掘調査などにより資料数と国内の琥珀産出地に関する情報が増加し、資料は最低限整っているといえる。

本稿では、その中でも古墳時代の琥珀製玉類を対象として、近畿地方では奈良県に次いで琥珀製玉類の出土量が多い三重県の資料に着目し、それらを形状と法量、穿孔方法によって分類する。そのうえで、その生産体制と流通形態について検討していきたい[1)]。

令和４年７月６日受理　*文学研究科文化財史料学専攻博士前期課程　在学生

Ⅰ　研究史・問題の所在

研究史には古墳時代の琥珀製玉類を対象とした研究が僅少である点を踏まえ、他の時代を対象とした研究及び化学分析に関する研究も加えた。

1　考古学分野の研究史

⑴　古墳時代以前・その他

寺村光晴の研究　琥珀製玉類の製作に関して初めて報告を行った。千葉県粟島台遺跡の発掘調査において縄文時代中期の層より砥石、穿孔工具が出土したことから、縄文時代中期には琥珀製品の製作は行われていたものとした[2)]。その後、縄文・弥時代における琥珀製玉類出土例を総括し、出土傾向・流通経路について考察した。そのうえで、弥生時代から古墳時代の移行期の琥珀製玉類については、前期古墳の出土器種のほとんどが勾玉であり、それらが石釧などの石製品と共伴する点に着目して、琥珀は弥生時代終末期頃～古墳時代前期代に勾玉として出現し、石製品の分布・保有に密接に関係するものと考えた。また、琥珀が古代国家成立期における初期王権の政治的勢力に無関係でないことを指摘した[3)]。

相京和茂の研究　縄文時代遺跡出土琥珀を対象に法量・穿孔軸・形態を基準として類型の設定、これらの時間的・空間的分布について分析し、機能と用途、琥珀の流通経路・構造について考察した。また、産地については地質学的観点からの分析を試みた。琥珀は縄文時代中期において積極的に採取され、流通対象とされた。琥珀の機能としては生存財、奢侈財、貴重財として機能し、財のカテゴリー体系に基づく交換と想定した。流通経路については岩手県久慈市を産地とした東北北部と千葉県銚子市を産地とした関東南西部、中部高地の２地域に分けられることを指摘した。流通構造に関しては、近距離圏の非管理型、中距離圏・産地周辺拠点集落管理型、遠距離・遠隔地拠点集落管理型の３類型を設定した。この中でも遠距離・遠隔地拠点集落管理型の出現は琥珀の財としての価値の高まりを表すものであるとし、琥珀の流通を考えるうえで重要であると指摘している[4)、5)]。

松下　亘の研究　北海道・南樺太の琥珀製玉類の出土地を集成・分類し、分布、出現時期と系譜について考察した。出現時期においては、北海道は縄文文化晩期末葉から続縄文文化中葉までの間と想定し、琥珀玉の用材としての意義は、琥珀は硬度が低く脆弱であるという欠点があるものの、軽く細工が容易であり琥珀色という独特な色調を呈することであり、さらにヨーロッパに伝わる琥珀に関する伝承から、当時、琥珀に対して特別な扱いをしていたものと推察した[6)]。

⑵　古墳時代

池上　悟の研究　全国を対象とした古墳出土の琥珀製玉類を集成し、そのうちの棗玉と勾玉を中心としてその形状の相違、法量変遷と分布、また流通経路について分析した。中でも、千葉県下の出土が多く全体の約３分の１を占める点、器種では棗玉が８割以上を占め、また、それらの半数以上が古墳時代後期～終末期に帰属し、しだいに大型化する点を明らかにした。流通については、東日本地域のものは産出地及びその周辺地域で加工したものとし、西日本地域のものは周

辺に産地が存在するものの、僅かな産出量であることから、各地から搬入された原石を在地で加工したものである、また、出土量の地域差は産出地との距離に比例する可能性があると考察している。畿内のものにおいては、古墳時代後期以降のものである竜田御坊山３号墳出土の枕、平城京出土の花弁型装飾品など飛鳥～奈良時代の資料も加えて例に挙げ、形状、用途の変化を示したうえで原石を搬入し当地で製作したものと想定した[7)]。

斎藤あやの研究　古墳時代後期の琥珀製棗玉を対象とし、共伴遺物の編年をもとに５つの段階区分を設け、それをもとに出土墳墓数及び点数、法量変化・分布を分析した。棗玉の生産は古墳時代後期後半に最盛期を迎え、分布地域は後期後半に畿内から東海・関東地方に移行後は、千葉県下に偏在する点を明らかにした。また、時期が下るにつれ漸移的に大型化する傾向を示した。大型化する点については棗玉以外に水晶製切子玉、埋木製棗玉においても共通する傾向を示した[8)]。

大賀克彦の研究　弥生時代～古墳時代の玉類を系統立てて検討した。琥珀製玉類については弥生時代においては数少ない出土例が千葉県下で散見できるが、北海道を除いてほとんど流通していないことから、古墳時代の琥珀製玉類へと直続するものでないと考えた。大賀氏は製作器種の相違に着目し、西日本では勾玉が多くを占める。いっぽう、東日本では勾玉以外の器種が目立ち、古墳１基からの出土が多い事例が散見される点から、西日本のものは各地から搬入された原石を在地で加工、東日本のものは千葉県銚子産のものをその周辺地域で消費したと想定した。また、古墳時代中期後半～後期前葉は朝鮮半島南部においても棗玉の盛行期に該当し、この時期に出土の少ない九州地方において古墳１基から極端に多く出土することや、丁字頭勾玉の存在から舶載品を一定数含むことを想定する必要があることを指摘した[9)、10)]。

２　化学分析による研究史

植田直見の研究　出土琥珀の保存処理における問題点について検討したほか、弥生時代から奈良時代の琥珀製品の分析を行った。2007年に室賀氏と共に古代大和を中心とした有機質玉類の分析を行い、琥珀製玉類については大多数が岩手県久慈・福島県いわき産と同定した[11)]。2015年には東大寺金堂鎮壇具琥珀片を分析の分析を行い、岩手県久慈または福島県いわき産のものである可能性を示した[12)]。翌年には青谷上寺地遺跡と近隣地域の出土琥珀を分析し、それらは岐阜県瑞浪産、岡山県高梁市・奈義町、広島県三次市の４産地と近似することを示した[13)]。

室賀照子の研究　1979年から竹中享氏とともに奈良県富雄丸山・於・慈恩寺脇本古墳[14)]、1989年には奈良県曽我遺跡および御坊山古墳出土の琥珀製玉類の分析を行い[15)]、多くの資料が岩手県久慈市産であると同定した。曽我遺跡例については岩手県県久慈市、千葉県銚子産、岐阜県瑞浪市産と同定したことにより、複数の生産地から入手していた可能性が高まった。

３　問題の所在

以上の研究史を通して、改めて問題の所在と課題についてまとめたい。

１点目は、基礎的研究の不足である。琥珀製玉類については未報告や記述が簡単であるものが多く、前述の通り古墳時代を対象とした研究論文も僅少である。現状では発掘調査等で資料数が増加したことにより集成が行われ、分布、法量・形状による部分的分析は試みられているが、具

体的な製作技法の検討、厳密な分類・年代の特定には至っていない。そのため、これらの検討を行うことが必要不可欠である。

２点目は、流通についてである。これまで流通過程について考える上で重要となる産出地については、これまで化学分野において赤外線スペクトルや熱分析・分解－ガスクロマト等の理化学的分析が多く行われてきた。だが、分析資料中には劣化が進み化学変化が生じたものが含まれている場合があり、分析結果に反映されている可能性がある。しかし、考古学分野ではこの問題に目を向けようとせず、化学分析の結果のみで解決しようとする傾向にある。そのため、化学分析と考古学分野が連携した上で評価する必要がある。

Ⅱ　琥珀製玉類の特徴と穿孔方法

１　琥珀製玉類の特徴

列島内外を問わず古くから琥珀を装身具材として用いた理由として、松下氏が述べたように脆弱であるという欠点を持ちながらも、加工が容易であること、琥珀色という独特な色調を呈するという長所を有することが大いに関係していると考えられる[6)]。

琥珀製玉類は、北海道内から出土した資料から、旧石器時代から続縄文時代と古くから製作されていたことが明らかとなっている[16)、17)]。いっぽう、本州では琥珀製玉類は縄文時代より製作されており、その盛行期は縄文時代中期に求められる[4)、5)]。しかし、弥生時代においては本州からの出土は極少であり、北海道内（続縄文時代）では多くの出土が認められるが、本州では千葉県の房総半島において若干の例が確認できるのみである。古墳時代前期中葉になると再び製作されるようになる[3）17)]。

古墳時代の琥珀製玉類の器種組成は縄文時代のものとは異なるものであり、直続するものでないと考えられてきた[10)]。しかし、古墳時代に多く流通する棗玉や管玉は、縄文時代及び続縄文時代から流通しており、既に定型が存在している[17)]。縄文時代の琥珀製玉類は小玉、大珠、垂玉、臼玉、管玉、棗玉などの器種で組成する。対して古墳時代の器種組成には、勾玉・棗玉・丸玉の他、わずかではあるが臼玉、平玉、管玉、小玉などの器種が含まれる。また、例外として、奈良県斑鳩町の竜田御坊山３号墳出土の枕がある[18)]。古墳時代の琥珀製玉類にかんしては、器種の８割以上を棗玉が占めることから、琥珀製玉類＝棗玉と認識される場合が多い。これは、琥珀製玉類一の特徴である。

２　穿孔方法

穿孔方法は、比較的軟質である緑色凝灰岩、滑石製玉類等も翡翠などの硬質素材と同様の工具、方法を採用しているため琥珀製玉類も同様の工具・方法を応用することで穿孔は可能と考える[19)]。

穿孔方向は、勾玉においては片面穿孔であるものが多く、その他の器種は稀に片面穿孔のものが存在するものの、ほとんどが両面穿孔である[7)]。

穿孔工具は直径２～５㎜程度の針・錐状工具を用いており、容易に開始部・終了部とも同一の

径で穿孔が可能とされる方法として弓錐や舞錐を採用していた可能性が高い。また、小孔（試孔）が残存しているものも見られる。舞錐等で本穿孔を行う前に、本穿孔工具である錐状工具を固定するため、直径１～２㎜程度の針状工具を用いて穿孔したと考えられる。針状工具については、熱で軟化する琥珀の性質を利用し、熱して使用していた可能性も考えられよう。

３　小結

先の内容に加えて、旧石器時代と古くから琥珀製玉類の製作が認められるが、古墳時代のものとは器種組成関係が異なる[17)]。しかし、その反面、棗玉や管玉など縄文時代より製作されている器種が古墳時代にもみられ、型式学的に同一の形態が存在する点や、琥珀製玉類出現期（古墳時代前期中葉)と続縄文中期以降が概ね同時期に類比する点を踏まえると、両者は密接な関係にあることは明白であり、古墳時代の琥珀製玉類は古墳時代以前から直属するものでないとは言い切ることは難しい。むしろ、文化的差異から器種組成が異なるとしても、連繋していると言えるのではないか。

Ⅲ　分類・年代

琥珀製玉類の中でも勾玉・棗玉は、製作時期と地域が限定される。そのため、ここでは勾玉と棗玉を対象として、勾玉は分類し、棗玉については型式を設定して年代を検討する。

１　集成（表１）

集成は池上・斎藤氏の集成に筆者が新たに事例を加えたものである[7、8)]。集成するにあたっての留意点を幾つか挙げる。

特に琥珀と埋木製玉類は色調、器種共に類似点が多いことから、稀に判別が難しい個体が存在する。よって、報告書では琥珀として報告されていない資料でも、筆者が可能な範囲で資料調査を行い、質感や色調などを確認し琥珀製である判断した資料については集成に含めた。また、棗玉として報告されていないものでも、その範疇に含めたものもある。その逆もまた然りである。

なお、扱う資料は分類可能である資料のみを対象とした。

２　分類

⑴　勾玉

勾玉については種類と法量によって分類した。基準は以下の通りである。

種類　素頭と頭部に２～４条の線刻のある丁字頭の二種類に分類する。

法量　長1.５㎝以内を１，長２㎝以内を２、長３㎝以内を３、長３㎝以上４とする。

表２は左から順に、重要度が高い要素を並べたもの、図２は勾玉の諸例である。

⑵　棗玉

棗玉は中央部に最大径を有し、両端部がすぼまる形状を特徴とする器種である。一概に棗玉と

表２　勾玉の諸要素

型式		遺跡名(報告No.)	穿孔 方向 片面 I a	穿孔 方向 片面 I b	穿孔 方向 片面 II	穿孔 方向 両面 a	穿孔 方向 両面 b	穿孔 試孔	穿孔 孔径（mm）	法量	産地分析	備考
素頭	1	上椎ノ木1号（6）	●					?	0.3	4	K/I	
	2	横山13号（北棺（2））	●						0.1	2		
	3	横山13号（南棺（15））	●						0.2	2		
	4	横山14号（20）	●						0.2	2		
	5	塚原		●					0.5	4		
不明	1	横山13号墳（北棺(1)）	?						×	1?		頭部欠損、素頭？
	2	木ノ下	?						0.1	?		

・法量… 1.長1.5cm以内　2.長2cm以内　3.長3cm以内　4.長3cm以上
・産地分析… K:岩手県久慈産　I:福島県いわき

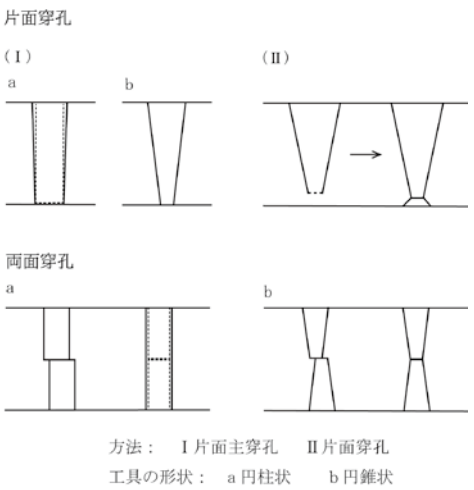


図１　穿孔方向と工具の形状

図２　勾玉の諸例（１／２）

言っても、惰円形状のものから切子玉のように面取り加工がされているもの、研磨加工が丁寧であるもの、反対に荒く自然面を残すものなど個々の様相を異にしている。

棗玉については、外形・縦断面形と法量を主に分類し、型式を設定した。表３は左から順に重要度が高い要素を並べたものである。基準は以下の通りである。

法量　長1.5cm以内・径1.5cm以内を１、長2.5cm以内・径２cm以内を２、長2.5cm以上・径２cm以上を３とする。

棗玉は、以下の４型式に分類できる。型式は以下の通りである。

１．円形型　縦断面形が惰円形に近い形状である。両端部はすぼみ、中央が膨らむ。全体的に丸みを帯びている。円形型は棗玉の定型である。

２．方形型　縦断面形が長方形に近い形状である。端部のすぼまり・中央の膨らみは少ない・

表３　棗玉の諸要素

型式		遺跡名(報告No.)	穿孔 方向 片面 I a	片面 I b	片面 II	両面 a	両面 b	試孔	孔径(mm)	法量	産地分析
円形	1	横山13号（北館（4））				●			0.2	1	
	2	鍛冶3号（74）				●			0.2	1	
	3	天童山8号（31）				●			0.2	1	K/I
	4	山添2号（174）				●			0.2	1	
	5	山添2号（175）				●			0.2	1	
	6	横山13号（北館（3））				●			0.2	2	
	7	横山13号（北館（6））				●			0.2	2	
	8	横山13号（北館（5））				●			0.2	2	
	9	横山14号（21）				●			0.2	2	
	10	浅小谷3号（334）				●			0.3	2	
	11	浅小谷3号（335）				●			0.4	2	
	12	河田A-4(19)号(第1主体（70))				●			0.2	2	
	13	天童山8号（32）				●			0.2	3	K/I
	14	天童山8号（33）				●			0.3	3	K/I
	15	天童山8号（34）				●			0.3	3	K/I
	16	八乳谷2号				●		●	0.6	3	
	17	カリコ（第2主体（30））				●			0.2	1	
	18	カリコ（第2主体（32））				●			0.4	1	
	19	カリコ（第1主体（33））				●			0.4	2	
	20	カリコ（第2主体（33））				●		?	0.4	2	
	21	カリコ（第2主体（28））				●			0.3	2	
	22	カリコ（第2主体（34））				●		?	0.3	3	
	23	高井				?			0.2	×	
	24	曽我崎3号				?			0.2	×	
	25	大城5号				?			×	×	
	26	大城5号				?			×	×	
方形	1	二ノ谷（11−8）	●						0.2	1	
	2	天健1号（98）				●		●	0.4	1	
	3	山ノ下B20号（5）				●			0.3	1	
	4	山ノ下B20号（8）				●			0.3	1	
	5	山ノ下B20号（9）				●			0.3	1	
	6	山ノ下B20号（10）				●			0.2	1	
	7	河田A-6(20)号（第2主体（122））				●			0.4	1	

型式		遺跡名(報告No.)	穿孔 方向 片面 I a	片面 I b	片面 II	両面 a	両面 b	試孔	孔径(mm)	法量	産地分析
多角形 I	1	井田川茶臼山（2号石棺（100））				●			0.2	2	K/I
	2	井田川茶臼山（2号石棺（101））				●			0.2	2	K/I
	3	井田川茶臼山（2号石棺（102））				●			0.2	2	K/I
	4	井田川茶臼山（2号石棺（103））				●			0.2	2	K/I
	5	井田川茶臼山（2号石棺（104））				●			0.2	2	K/I
	6	井田川茶臼山（IV群 棺台廠設（112））				●			0.2	2	
	7	井田川茶臼山（IV群 棺台廠設（113））				●			0.2	2	
	8	奥山（T2）				●			0.3	2	
	9	井田川茶臼山（2号石棺（98））				●			0.2	3	K/I
	10	井田川茶臼山（2号石棺（99））				●			0.2	3	K/I
	11	井田川茶臼山（IV群 棺台廠設（111））				●			0.2	3	
多角形 II	1	井田川茶臼山（1号石棺（12））				●			0.1	1	
	2	井田川茶臼山（IV群 棺台廠設（115））				●			0.1	1	
	3	井田川茶臼山（1号石棺（4））				●			0.2	2	
	4	井田川茶臼山（1号石棺（5））				●			0.2	2	
	5	井田川茶臼山（1号石棺（6））				●			0.2	2	
	6	井田川茶臼山（1号石棺（9））				●			0.2	2	
	7	井田川茶臼山（1号石棺（10））				●			0.2	2	
	8	井田川茶臼山（1号石棺（11））				●			0.2	2	
	9	井田川茶臼山（IV群 棺台廠設（116））				●			0.2	2	
	10	大塚C1（第1主体（30））				●			0.2	2	K/I
	11	井田川茶臼山（1号石棺（7））				●			0.2	3	
	12	井田川茶臼山（1号石棺（8））				●			0.2	3	
	13	大塚C1（第1主体（未））				?			×	×	
	14	大塚C1（第1主体（未））				?			×	×	
	15	太閤寺1号（第2主体（未））				?			×	×	
	16	太閤寺1号（第3主体（未））				?			×	×	
	17	太閤寺1号（第4主体（未））				?			×	×	
不定形	1	井田川茶臼山（2号石棺（106））				●			0.2	×	K/I
	2	井田川茶臼山（IV群 棺台廠設（114））				●			0.2	2	
	3	山ノ下B20号（1）				●			0.2	1	
	4	山ノ下B20号（4）				●			0.2	1	
	5	山ノ下B20号（7）				●			0.2	1	
	6	カリコ（第2主体（31））				●			0.2	1	

・法量… 1.長1.5cm以内・径1.5cm以内　2.長2.5cm以内・径2cm以内　3.長2.5cm以上・径2cm以上

・産地分析… K:岩手県久慈産　I:福島県いわき

なく、丸みを帯びない。

３．多角形Ⅰ型　縦断面形が六角形に近い形状で、外面の面取り加工は施されていない。

４．多角形Ⅱ型　縦断面形が六角形に近い形状で、外面の面取り加工が施されている。

５．不定形　研磨があまく自然面が多く残す、ないしは形が歪であるなど、上記のいずれにも属さないもの。

⑶　共通項目

１．穿孔　① 方向と工具の形状（図１）　② 孔径　③ 試孔の有無　２．産地分析[11)]

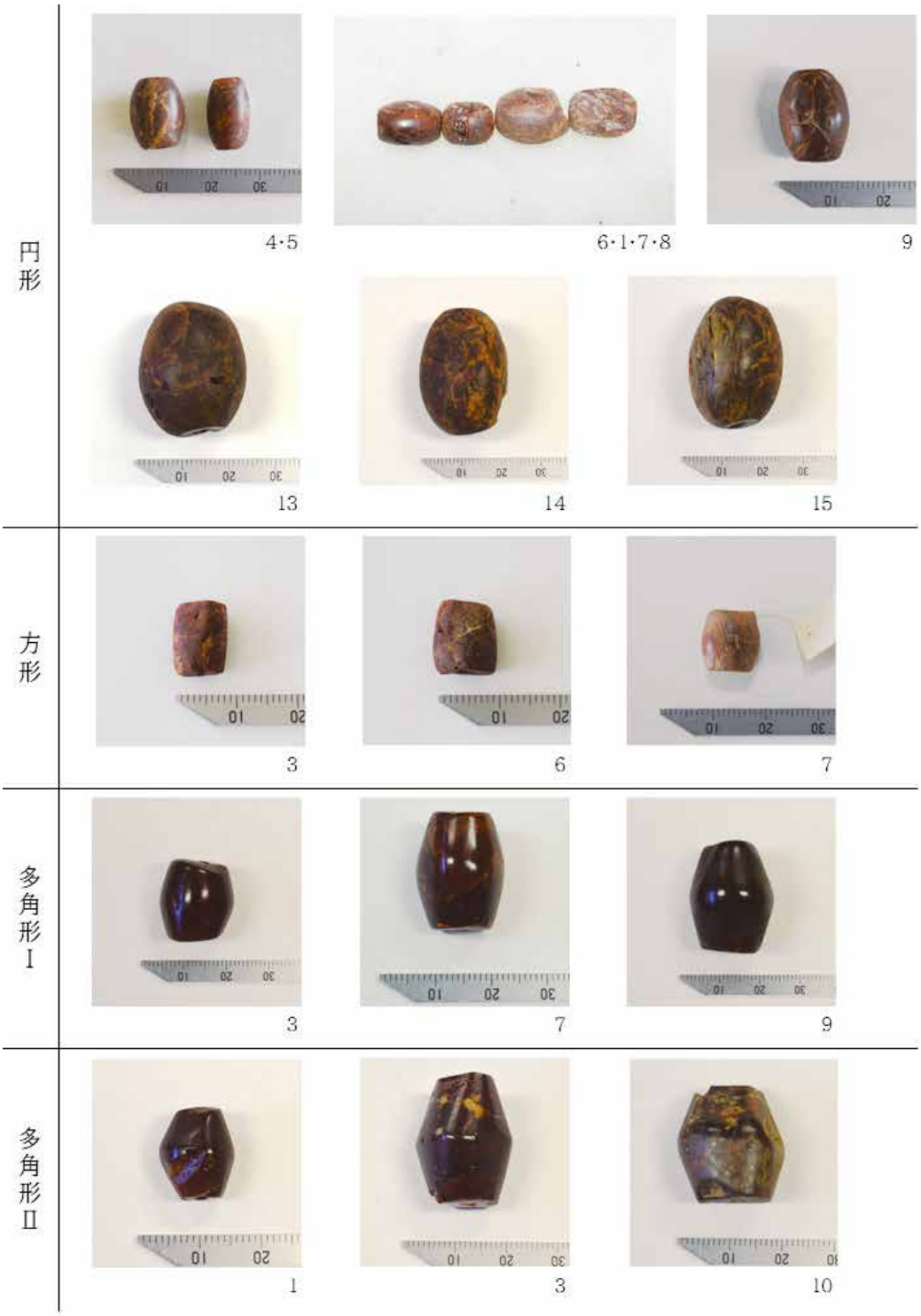
３　年代

時期区分については、共伴遺物、埋葬形態を手掛かりに考えたい。ここでは、須恵器[20)、21)]と青銅鏡[22)]、円筒埴輪[23)]、鉄鏃[24)]、翡翠製勾玉[10)]を参考にした。さらに、器種別に時期的変遷と出土量を示した（表４）。

⑴　勾玉の年代

出現期は前期末葉に求められ、中期初頭まで継続する。その後は中期中～後葉は一時衰退するが、中期末葉～後期初頭にかけて再び出現する。

前期末葉～中期中葉までは大型品が流通するが、中期末葉～後期前葉はいずれも小型品である。



※遺物番号は表3に対応

写真１　棗玉の諸例

⑵　棗玉の年代

円形型　中期末葉～終末期にわたって流通する。後期前葉より出土量の増加がみられ、後期後葉にそのピークをむかえる。なお、後期後葉以降は大型品が製作されるようになる。

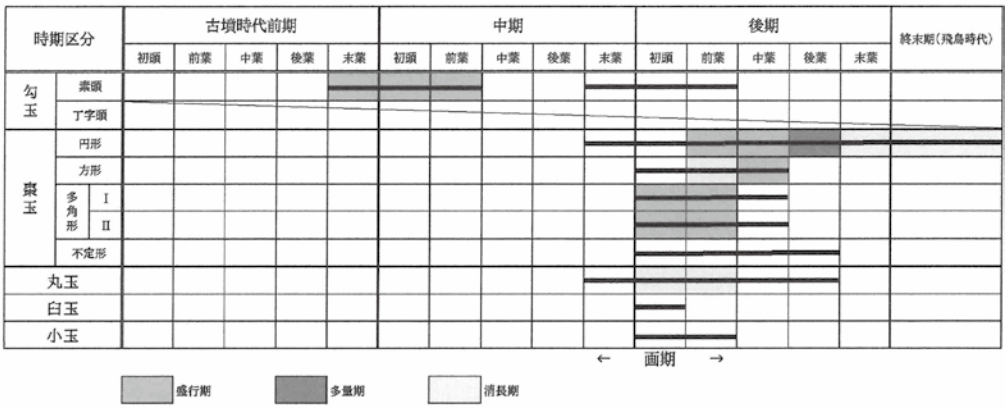
方形型　後期初頭に出現。前葉に消長期をむかえるが中葉に増加。全て小型品である。

多角形Ⅰ型　後期初頭～前葉に盛行期を迎える。小～大型品すべてが存在する。

多角形Ⅱ型　多角形Ⅰ型と同様の傾向である。

以上から、三重県下における琥珀製玉類流通の画期は、再流通から棗玉の各型式の出土数増加が見てとれる中期末葉～後期前葉に求められることがわかった。

表４　器種変遷と出土量



Ⅳ　分布

先の年代の検討から、三重県下における琥珀製玉類生産・流通の画期は中期末葉～後期中葉(後期前半)に求められることが明らかとなった。よって、ここではこれらの時期別に分布状況を見ていきたい（図３、表１）。

前期末葉　伊勢平野の鈴鹿川流域に１例のみ確認できる。

中期初頭～前葉　志摩半島と伊賀盆地の木津川流域にそれぞれ１例ずつ確認できる。

中期中～後葉　いずれの地域にも分布なし。衰退期である。

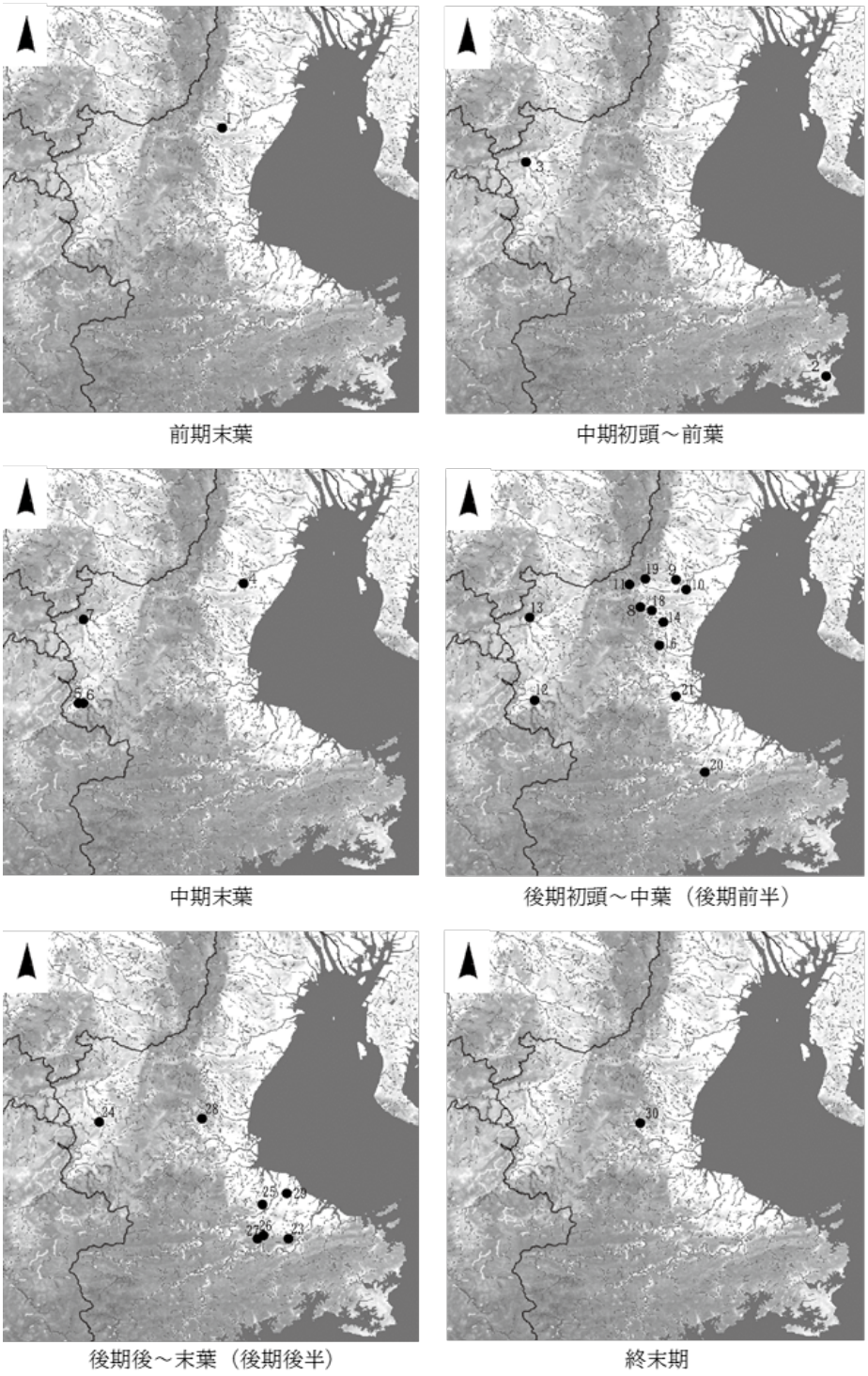
末葉　伊勢平野では鈴鹿川流域に１例、伊賀盆地は木津川流域に３例ずつ確認できる。さらに、伊賀盆地では大和と隣接する県境に近い宇陀川流域にも分布が確認できるようになる。

後期初頭～中葉（後期前半）　伊勢平野全域に分布するが、特に鈴鹿川流域と、その南の安濃川流域に分布が濃密である。伊賀盆地では、この時期も前時期の傾向を引き継ぐ。

後期後～末葉（後期後半）　伊勢平野では、これまで分布が集中していた鈴鹿川流域や、安濃川流域では分布が希薄になる。対して、伊勢志摩地域の櫛田川・宮川流域に分布が集中するようになる。伊賀盆地では長田川流域に１例のみ確認できる。

終末期　伊勢平野の安濃川流域に１例のみ確認できる。

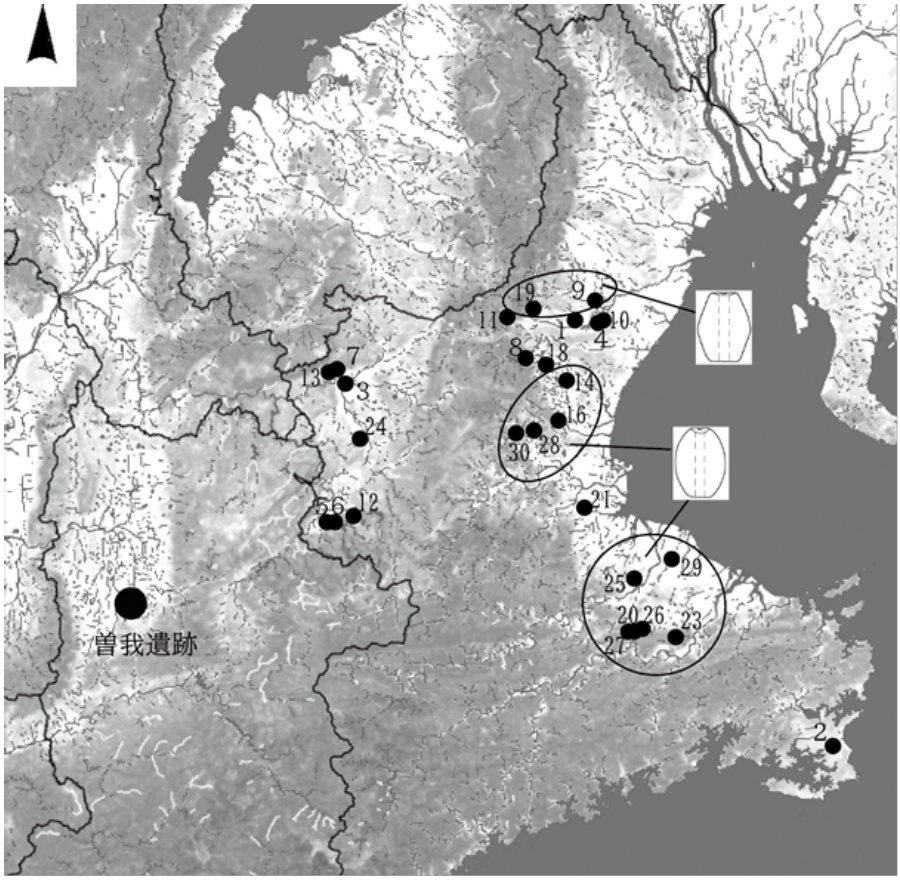
以上、時期別の分布を確認した。後期中葉以降、伊勢平野では北勢地域の鈴鹿川流域、中勢地



※遺跡番号は表1に対応

図３　時期別分布図

域の安濃川流域から、流通拠点が伊勢志摩地域の櫛田川・宮川流域へと南下し、伊賀盆地では山城・近江・大和への入り口である木津川流域・宇陀川流域と、交通の要所に分布することがわかった。



※遺跡番号は表1に対応

図４　出土遺跡分布

Ⅴ　考察

本稿ではここまで琥珀製玉類のうち、勾玉と棗玉の分類・型式を提示し、その年代と分布状況について検討した。以下では生産体制と流通形態を地域ごとに検討したい（図４、表１）。

伊賀盆地　地理的な独立性や畿内との近接性から、弥生時代以降、布引山地を隔てた伊勢平野とは異なる文化をもつ。伊賀盆地は地勢や水系の違いによって小地域に分かれており、主要な古墳の分布から律令制下において阿拝・山田・伊賀・名張の四郡が定められる以前より、すでに地域区分されていることがわかる。

特に注目すべきは、宇陀川流域の横山13号墳（５）である。玉材のバリエーションが豊富である点は中期の特色であるが、琥珀製玉類にかんしては、前期代に顕著な勾玉と中期後半～後期に顕著な棗玉をはじめとする複数の器種を一括して副葬する例は稀有である。類例としてあげられるのは、同時期の築造で奈良盆地東南部に拠点を置く、渡来系集団の墳墓である赤尾崩谷１号墳のみである[25)]。横山13号墳自体は、この地域における木棺直葬墓の中では最大規模ではあるが、小地域首長墓クラスに留まる。しかし、後期前葉には同じ丘陵上に地域最大かつ初見の前方後円墳である琴平山古墳が築かれている。埋葬施設は片袖式の畿内型横穴式石室であり、当時としては最新式である竪矧鋲留衝角付冑や直刀を副葬する。このように、宇陀川流域では中期末葉～後期にかけて畿内政権が徐々に勢力を拡大する様子がうかがえる。伊賀盆地では大和の曽我遺跡における玉生産の終焉と連動するように、木津川・宇陀川流域といった交通の要所には分布しなくなる。

後期後葉になると、長田川流域の天童山８号墳（24）のみとなる。大型品であるのは、畿内政権による玉材の制約がなくなったあとで、東日本の太平洋沿岸地域の産出地周辺での消費が盛んになったためだろう。

伊勢平野　鈴鹿川流域は三重県下でも古墳の分布密度が高く、畿内から東日本地域への玄関口にあたる地域である。この地域は地域が全体として系統的に発展したのではなく、大型前方後円墳を中心に、いくつかの小地区に分化して発展していったと考えられる。だが、俯瞰すると、最古の上椎ノ木１号墳（１）をはじめとして、中期の西ノ野４号墳（４）、後期の井田川茶臼山古墳（９）・保子里１号墳（10）、木ノ下古墳（11）、太岡寺１号墳（19）と衰退期を除き、安定して琥珀製玉類が流通している。

この地域おける資料の特徴としては、１墳墓ごとの出土数及び、国内では他に類例のない多角形Ⅱ型の出土数が多いこと、さらに、後期の資料は質感・色調ともに他地域とは異なることがあげられる。確認できた井田川茶臼山古墳（写真１）、木ノ下古墳、太岡寺１号墳例は、色調は茶褐色・深紅色を呈し、透明度・硬度が高い点が共通する。これら事象を勘案すれば、鈴鹿川流域には独自の入手形態が存在するものと理解することが可能であろう。

中でも井田川茶臼山古墳は初期の横穴式石室をもち、その形態は北部九州型石室の技術系譜を引くものと指摘されている[26)]。また、井田川茶臼山古墳の対岸に所在する保子里１号墳も同時期の地域首長墓であり、残念ながら型式は不明であるが、琥珀製玉類の出土数・金製垂飾付耳飾や地金銀象嵌捩じり環頭太刀をはじめとする副葬品ともに豊富であり、特異性が際立つ。井田川茶臼山古墳や保子里１号墳の被葬者は、近畿政権との関係を築きながらも、独自に他地域や国外とも交易を行うことが可能な人物であったと推測する。北勢地域における横穴式石室の系譜・導入時期と、朝鮮半島南部での琥珀製棗玉の盛行期（中期後半～後期前葉）が概ね合致する点を踏まえると、この地域の古墳から出土する琥珀製玉類は、舶載品の入手が最も妥当であると考える。あるいは、化学分析の結果を加味するならば[11)]、有力首長層が管理する在地の工人集団によって、東日本地域の産出地から独自に大量の原石を入手・製作したと考えることもできるだろう。鈴鹿川流域より南の安濃川流域でも、後期前半を中心に竪穴系横穴式石室をもつ古墳がいくつか築かれる。大塚Ｃ1号墳（８）は、群集墳を形成する中の一古墳ではあるが、安濃川流域では例のな

い鈴鹿川流域の井田川茶臼山古墳に形態が類似する初期の横穴式石室をもつ。同時に、琥珀製棗玉にかんしても、型式や質・出土数において共通点が多く、鈴鹿川流域との接触があったと推測する（写真１）。

安濃川地域では大塚Ｃ１号墳例を除くと、棗玉の円形型の分布が目立つ。そして、後期後葉には、その流通拠点が伊勢志摩地域の櫛田川・宮川流域へと南下している。背景には、県内でも時期差のある須恵器の生産とそれに伴う渡来系集団がこれに関係していると考える。安濃川地域では、中期末葉から後期にかけて久居古窯群、県内最大の徳居古窯群で須恵器が生産される。同地域の大規模な集落・生産遺跡である六代Ａ遺跡では、初期須恵器とともに韓式系土器が出土しており、渡来系集団の流入は明らかである[27]。渡来系集団は須恵器の生産に関与するとともに、様々な最先端技術を導入したと考えられ、それには玉作に関係する技術も含まれており、加えて、良質な湾港が複数存在する安濃川流域では[28]、各地からもたらされたであろう様々な文物の一つに琥珀が含まれていたとすれば、在地で製作された可能性は十分考えられるだろう。しかし、この時期は大和の曽我遺跡での玉生産が盛んであり、かつ、交通の要所である安濃川流域を見落とすとは考え難い。よって、畿内政権によって分配されたものが、一定数含まれると考えた方がよい。後期中葉～終末期かけては、須恵器の生産は櫛田川流域の明気窯跡群で展開されており、琥珀製玉類が多く出土する河田古墳群で、その存在が確認できる[29]。

安濃川、櫛田川・宮川流域の間に位置する雲出川流域は、畿内型横穴式石室の分布が濃密な地域で[26]、この地域で琥珀製玉類が出土したのは天保１号墳（21）のみである。副葬品には、剣菱型杏葉を含む馬具類、銀製空玉・山梔玉があり、地域で最大級の畿内型横穴式石室を持つという点でも、畿内政権との結びつきの強さが見てとれる。共伴する方形型の琥珀製棗玉については、他の資料と比較すると、穿孔方法が特殊であると思われる。おそらく、本穿孔をおこなう前に試孔を施したものと考えられるが、孔を抉って広げたような痕跡がみられる[30]。

現時点では穿孔技術の系統に関する積極的な根拠を示せる段階に至っていないため、今後の課題としたい。

おわりに

以上、三重県下における琥珀製玉類の生産体制・流通形態について検討した。琥珀製玉類の生産に関しては、三重県に限らず生産遺跡の存在があまり明らかでないために、現状では未解明な部分が多い。また、琥珀製玉類の成立は先に述べた理由から、生産体制・流通形態は複雑化することは明白である。本稿では十分に論じることができていないため、今後は分類・年代などの基礎的研究においては引き続き継続し、さらに、穿孔技術の系統や他素材玉類との組成関係ついて検討したい。

謝辞

本稿・卒業論文の執筆にあったって、大学・大学院の指導教員である豊島直博先生には様々なご指導・ご助言を賜りました。また、資料調査に際して、村田麻美氏（多気町郷土資料館）、村木一弥氏（津市埋蔵文化財センター）、門田了三氏（名張市郷土資料館）、小林あや子氏（松阪市文化財センター）、三宅知世・高松雅文氏（三重県埋蔵文化財センター）には、便宜を図っていただくとともに、多くの貴重なご意見・ご指導を賜りました。そして、植田直見氏（元興寺文化財研究所）には、琥珀の化学分析についてご指導に加え、関連資料をご提供頂きました。末尾ながら、心から深く感謝申し上げます。（順不同、所属は当時）

註

1）本稿は筆者が2021（令和３）年１月に奈良大学文学部文化財学科へ提出した卒業論文に加筆・修正を行ったものである。

2）寺村光晴・安藤文一　1991「千葉県粟島台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No.88　ニュー・サイエンス社

3）寺村光晴1985「日本先史時代の琥珀 ―出現と様相―」『和洋女子大学文学部創設三十五周年記念論文』和洋女子大学

4）相京和茂2007「縄文時代における琥珀の流通」『考古学雑誌』第91巻　第２号　日本考古学会

5）相京和茂2007「縄文時代における琥珀の流通」『考古学雑誌』第91巻　第３号　日本考古学会

6）松下　亘1969「北海道と南樺太の琥珀玉について」『物質文化』第12号　物質文化研究会

7）池上　悟2010「古墳出土の琥珀玉」『古墳文化論攷』六一書房

8）斎藤あや 2008「古墳時代後期における琥珀製嚢玉の再検討―地域的偏在と大型化―」『史叢』78 日本大学史学会

9）大賀克彦2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第９巻　小学館

10）大賀克彦2013「①玉類」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』同成社

11）植田直見・室賀照子2007「古代大和を中心とした有機質玉類の流通について」『由良大和古代文化研究協会紀要』第 12 巻 由良大和古代文化研究協会

12）東大寺2015『国宝　東大寺金堂鎮壇具　保存修理調査報告書』

13）水村直人・植田直見2016「青谷上寺地遺跡出土の琥珀」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告11　石器(2)』鳥取県埋蔵文化財センター

14）室賀照子1979「奈良県富雄丸山・於・慈恩寺脇本古墳出土の琥珀の科学的研究」『橿原考古学研究所論集』第 5 巻：創立四十周年記念 吉川弘文館

15）室賀照子・竹中 亨1989「奈良県曽我遺跡および御坊山古墳出土古代琥珀の産地同定」『由良大和古代文化協会研究紀要』第１巻 由良大和古代文化研究協会

16）野口義麿1952「石器時代の琥珀について」『考古学雑誌』第38巻　第１号　日本考古学会

17）日本玉文化研究会2017『玉文化』第14号

18）橿原考古学研究所1977『竜田御坊山古墳 付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第32冊
19）鹿田　洋2017「穿孔技術の史的変遷―古代における穿孔技術の再現実験を援用して―」『2017年度精密工学会春季大会学術講演会公演論文集』精密工学会
20）田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
21）神野恵・森川実2010「1. 土器類」『図解平城京事典』柊風社
22）福永伸哉2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
23）川西宏幸1971「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻　第２号　日本考古学会
24）水野敏典2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』
25）橋本輝彦・木場佳子2004「赤尾崩谷古墳群」『大和を掘る22』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
26）土生田純之・亀田修一編2012『古墳時代研究の現状と課題　古墳研究と地域史研究　上』同成社
27）穂積裕昌2003「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズ８
28）三重県埋蔵文化財センター2002『六台Ａ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財報告115－6
29）多気町教育委員会1974『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』多気町文化財調査報告２
30）三重県埋蔵文化財センター1991『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊３－天保古墳群』三重県埋蔵文化財報告87－9

参考文献

ディーター・シュレー（上田恭一郎　訳）2002『日本の琥珀』北九州自然史友の会
寺村光晴1984「日韓古代のヒスイと玉」『シンポジウム　東アジアと日本海文化』小学館
松下　亘1983「琥珀」『縄文文化の研究』８　雄山閣
関西大学文学部考古学研究室1992『紀伊半島の文化史的研究　考古学編　本文・図版』関西大学文学部考古学研究　第6冊　清文堂
大賀克彦2008「古墳時代後期における玉作の拡散」『古代文化研究』第16号　島根県古代文化センター
日本琥珀研究会会誌 2001『こはく』No 3
日本琥珀研究会会誌 2004『こはく』No 5
藤永太一郎ほか 1974「本邦出土琥珀の産地分析―赤外吸収スペクトルによる研究―」『日本化学会誌』９巻
藤永太一郎1976「外国産及び本邦産コハクの産地分析」『分析化学』25 巻11 号 日本分析化学会
小林行雄1964『続古代の技術』 塙書房
潮見　浩1988『図解　技術の考古学』有斐閣選書
鹿田　洋1992「古代技術の再現実験　その２　穿孔技術体系化の試み」『精密工学会誌』精密工学会
鹿田　洋2017「穿孔技術の史的変遷―古代における穿孔技術の再現実験を援用して―」『2017年度精密工学会春季大会学術講演会公演論文集』精密工学会
河村好光2015『倭の玉器　玉つくりと倭国の時代』青木書店
三好 玄 2016「古墳時代須恵器編年にかんする方法論的検討―田辺編年の今日的理解から―」『古代文化』第68巻　第1号

近藤義郎編1992『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社
近藤義郎編1992『前方後円墳集成』中部編　山川出版社
日本玉文化研究会2018『玉文化』第15号
日本玉文化研究会2019『玉文化』第16号
小田富士雄1980「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座4　朝鮮三国と倭国』学生社
坂　靖2013「古墳時代の遺跡構造と渡来系集団」『古代学研究』第199号　古代学研究会
坂　靖・中野咲2016『古墳時代の渡来系集団と出自と役割に関する考古学的研究』研究成果報告書
三重県埋蔵文化財センター2006『研究紀要―特集　古墳時代―』第15―1号
土生田純之・亀田修一編2012『古墳時代研究の現状と課題　古墳研究と地域史研究　上』同成社
大岡由記子2005「古墳時代における大和の玉作り」『立命館大学考古学論集Ⅳ』 立命館大学考古学論集刊行会
谷澤亜里2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
米田克彦2008「古墳時代玉生産の変革と終焉」『考古学ジャーナル』No.567　ニュー・サイエンス社
李　漢祥2008「百済王興寺木塔址一括遺物の性格と意義」『東アジアの古代文化』大和書房

発掘調査報告書・図録

安濃町1994『安濃町史　資料編』
橿原考古学研究所1977b『竜田御坊山古墳 付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第32 冊
橿原考古学研究所1989b『曽我遺跡 玉類集計表編』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第55 冊
鈴鹿市1980『鈴鹿市史』第１巻
玉城町郷土会1972『三重県度会群玉城町大字世古　カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』玉城町文化財調査報告Ⅰ
津市教育委員会2005『稲葉古墳群・鎌切古墳群発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告書44
津市教育委員会2010『―津市安濃町戸島―　山ノ下古墳群B支群（第3次）発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告書21
銚子市教育委員会2000『粟島台遺跡』
東京国立博物館1988『東京国立博物館図録目録　古墳遺物篇（近畿Ⅰ）』
名張市2010『名張市史　資料編　考古』第１巻
名張市遺跡調査会1995『奥出遺跡・奥出古墳群』
名張市遺跡調査会1999『横山古墳群・丸尾山古墳群・石取場古墳群』
松阪市教育委員会1998『松阪市山添町　山添2号墳発掘調査報告書』三重県松阪市埋蔵文化財調査報告
三重県2005『三重県史　資料編　考古１』
三重県2005『三重県史　資料編　考古２』
三重県埋蔵文化財センター1988『井田川茶臼山古墳』
三重県埋蔵文化財センター1989『上椎ノ木古墳・上椎ノ木館址』国一バイパスだより20号
三重県埋蔵文化財センター1990『三重県埋蔵文化財センター年報１.』
三重県埋蔵文化財センター1992『上椎ノ木古墳群・谷山古墳・正知浦古墳群・正知浦遺跡』三重県埋蔵文化

財調査報告100－１
三重県埋蔵文化財センター1995『明気窯跡群・大日山古墳群・甘粕遺跡・巣護遺跡』
三重県埋蔵文化財センター1997『曽祢崎（第2次）・曽祢崎古墳群』三重県埋蔵文化財報告146－3
三重県埋蔵文化財センター2006『天童山古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告275
三重県埋蔵文化財センター2012『浅子谷古墳群高尾北支群発掘調査報告　―伊賀市三田地内―』三重県埋蔵文化財報告331
三重県埋蔵文化財センター2018『平成29年度三重県埋蔵文化財年報』

挿図出典

図１、図３、図４　筆者作成。
図２　三重県埋蔵文化財センター1989、名張市遺跡調査1999、関西大学文学部考古学研究室1992より引用。
写真１　筆者撮影。

Abstract

Archaeological Research on Ambar Beads in the Kofun Period
― Excavated Example Mainly in Mie Prefecture ―

Yuka KOBAYSHI

This paper focus on the amber beads excavated from mounded tomb in Mie Prefecture, and present a classification based on shape, quantity, and dolling method, particularly for curved bead and jujube bead, which have a limited production period.

Anber beads excavated in Mie Prefecture range from the end of the early Kofun period to the end of the Kofun period. The late middle to early late period was considered as the epoch of production and distribution, since the reappearance of amber beads and the increase in the number of excavations of each type of amber beads can be seen.

The production system and distribution pattern of amber beads are closely related to the genealogy of horizonal stone chambers and the timing of their introduction, the production of beads by the regime and trends around the production of Sue stoneware.

Key words：①Ambar　②Beads　③Kofun Period　④Jujube bead

表１　三重県内出土琥珀製玉類集成表

No.	遺跡名	市町村	点数	勾玉		棗玉					丸玉	平玉	管玉	小玉	臼玉	不明	時期
				素頭	丁字頭	円形	方形	多角形 Ⅰ	多角形 Ⅱ	不定形							
1	上椎ノ木1号墳	亀山市	1	1													前期末葉
2	塚原古墳	志摩市	1	1													中期初頭～前葉
3	久米山６号墳	伊賀市	7													7	中期前葉？
4	西ノ野４号墳	鈴鹿市	1													1	中期末葉？
5	横山１３号墳	名張市	52	4		5					4			31	8		中期末葉
6	横山１４号墳	名張市	2	1		1											中期末～後期初頭
7	二の谷古墳	伊賀市	2				1				1						中期末～後期初頭
8	大塚Ｃ１号墳	津市	11						3							8	後期初頭～前葉
9	井田川茶臼山古墳	亀山市	25					10	11	2						2	後期初頭～前葉
10	保子里１号墳	鈴鹿市	15													15	後期初頭～前葉
11	木ノ下古墳	亀山市	1	1													後期初頭～前葉
12	奥出古墳群(SK6)	名張市	1					1									後期前～中葉
13	浅小谷３号墳	伊賀市	6			6											後期前～中葉
14	大城５号墳	津市	2			2											後期前～中葉
15	小丸山古墳	津市	1											1			後期前～中葉
16	鎌切３号墳	津市	1			1											後期前～中葉
17	八幡山１号墳	松阪市	14								14						後期中葉
18	山ノ下Ｂ２０号墳	津市	11				4			3						4	後期中葉
19	太岡寺1号墳	亀山市	4						3							1	後期中葉
20	河田Ａ－６号墳	多気郡多気町	2				1									1	後期中葉
21	天保1号墳	松阪市	1				1										後期中葉
22	才良吉田谷１号墳	伊賀市	1								1						後期中葉
23	カリコ古墳	玉城町	7			6				1							後期後葉
24	天童山８号墳	伊賀市	4			4											後期後葉
25	山添２号墳	松阪市	2			2											後期後葉
26	河田Ａ－４号墳	多気郡多気町	1			1											後期後葉
27	河田Ｂ－３号墳	多気郡多気町	1								1						後期後葉
28	高井古墳	津市	1			1											後期後葉
29	曽祢崎３号墳	多気郡明和町	1			1											後期末葉～終末期
30	八乳合２号墳	津市	2			1										1	終末期